

廃仏毀釈に
ついて
高野敦志



目次

はしがき	1
神道と仏教	3
神仏習合と廃仏毀釈	9
廃仏毀釈で修験道がなぜ目の敵にされたか	16
廃仏毀釈と英領日本	19
安丸良夫の『神々の明治維新』	23
金剛蔵王権現	29
尺八の音と虚無僧	31
戸隠不動尊の面影	34
廃仏毀釈の実態	41

41 34 31 29 23 19 16 9 3 1

はしがき

私は仏教に関しては門外漢だが、若い頃から仏教、密教、修験道関連の本を読み、各地の霊山を詣でてきた。その際に見聞きしてきたのは、明治初めの廃仏毀釈で、日本の文化財の多くが破壊されたり、海外に流出したということである。

近所のお堂の墓地には、地藏菩薩が並んでいるが、かつては多くが首を落とされていた。石仏の多くが欠けたりしているのは、自然の風化によるものではなく、廃仏毀釈の頃に行われた文化財の破壊が原因である。

ここに取り上げたのは、私自身が得た知識をまとめたものであり、真新しいことはほとんどないが、一般の方には多少の参

考になるのではないか。

巻末に「廃仏毀釈の実態」をまとめたが、これは壊滅的な破壊を受けたもののごく一部に過ぎない。とはいえ、江戸時代までの神社仏閣の姿を思い浮かべる際の助けにはなると思われる。

二〇二三年八月二十四日

高野敦志

表紙 戸隠不動尊跡（川崎市多摩区）

神道と仏教

邪馬臺国が九州にあつたか畿内にあつたかは、いまだ決着を見ていない。女王の卑弥呼は祭祀に鏡を使つていたとされるが、これは道教の影響によるものらしい。神道の元型は、中国の宗教の強い影響下で成立したと推測される。

大和朝廷が成立すると、日本は中国の政治制度にならつて、官僚制度を整備していく。ただし、中国の制度と大きく異なるのは、科挙の制度を採用しなかつた点、中国にはない神祇官を、政治の中枢を担う太政官と併置した点である。仏教が入る以前から、日本古来の神々を祀ることは行われていたが、神道の教義自体は、仏教に対抗するという形で整備されていった。

平安時代に入ると、最澄が開いた天台宗も、空海が開いた真言宗も、神道を仏教の中に取り込む形で吸収していく。「本地垂迹説」というのは、例えば、大日如来が天照大神に、阿弥陀如来が八幡神に、といった具合に、仏が日本の神として、化身の姿で現れると考えるのである。これは日本で始まつたことではなく、すでにインドにおいて、密教化した仏教が、ヒンズー教の神々を、曼荼羅の中に取り込む際に考え出した手法なのである。

鎌倉時代に入ると、日本の神の方が元だという「反本地垂迹説」が現れたり、道教が俗信化した陰陽道と、神道が混交すること、土御門神道が生まれたりした。また、密教と神道と陰陽道が混交した修験道も盛んになった。山伏というのは、悟

りを求める僧侶というより、呪力の獲得を目指した半僧半俗の存在だった。

江戸時代に入ると、儒教的な垂加神道を山崎闇齋が唱えた。幕末には神懸かりした教祖による天理教や黒住教などの、いわゆる教派神道が生まれた。

このように、明治維新までの神道は、純粹な形では存在しにくい状況で、日本人にとつては、神でも仏でも有り難ければ構わなかったのである。神も人間同様に修行するものと考えられ、僧形の八幡神像が作られ、神社で僧侶が読経していた。

ところが、江戸中期の国学者、本居宣長もとおりのりながが日本古来の道「古道」を明らかにすることを唱え、中国の儒教やインドの仏教など、外来文化の排除を主張しはじめた。その弟子だと自称する

平田篤胤ひらたあつたねは、神道からあらゆる仏教色を排除しようとした。これは復古神道と呼ばれる。明治維新の神仏分離令と、それに続く廃仏毀釈はいぶつぎしゃくは、この復古神道の考えによるものである。

神社から仏像や仏具が排除され、久能山の東照宮などでは五重塔が破却された。その一方で、各村に存在した多くの社やしろが統合され、それが国家による神道の国教化へとつながった。

神道は共同体の結束を図る機能と、五穀豊穰ごこくほうじょうなど現世利益への願いに関わっていたのに対し、仏教も古くは鎮護国家ちんごこくが期待されたものの、災厄さいやく消除しょうじょのための祈禱きとう、祖先崇拜とその供養くよう、悟りや極楽往生への願いという点で機能していた。仏教の方がより実存的で、個人の心の闇の部分に関わってきたと言える。

仏教と比べると、神道は現世的な存在で、個の問題より集団

の利益を重視した。生と死のような重大な事柄では仏に祈り、日常的な願いでは、仏よりは身近で、人間味のある神に祈っていた。

神はとりわけ穢れを嫌われるので、精進しょうじん潔斎けつさいを人々に求めた。その中で血の穢れと死の穢れを、最も忌み嫌われた。出産を座敷では認めない地方もあったほどで、現在でも葬式の時、神棚に白い紙で覆いをかける。神が死を忌み嫌われるからである。忌中きちゅうの間は神社への参拝も遠慮した。

仏が超越的な存在であるのに対し、神は偉人の心霊を祀る場合もあり、より人間くささが残っているというわけである。復古神道を信じて仏教を嫌う尊皇攘夷派そんのうじょういは、神道による葬儀を始めたが、これは神道の歴史からすれば異例のことだった。

江戸時代までは、天皇の葬儀も仏式で行われた。京都の真言宗大覚寺に行けば、歴代天皇の位牌いはいが祀られており、昭和天皇の位牌も存在する。

神仏習合と廃仏毀釈

日本人にとつては、神でも仏でも御利益をいただければ有り難い存在だった。江戸時代までは神仏習合が一般的で、多くの神社は別当寺に付属し、神前読経が行われたほか、僧形の八幡神像も作られた。日光の東照宮は本来輪王寺と一体のものであり、東照大権現として祀られた徳川家康は、薬師如来の化身であるとされた。

そこには本地垂迹説という考え方があり、日本の神々は仏が仮の姿で現れたものだとして説明された。天照大神は大日如来の、八幡神は阿弥陀如来の、おおくにぬしのみこと大国主命は大黒天が本地ほんじ（正体）であるというふうにある。

庶民レベルで神仏習合を典型的に示すのは、七福神への信仰である。恵比寿えびすは日本本来の神、大黒天、毘沙門天びしゃもんてん、弁財天はインドの神、福祿寿ふくろくじゆと寿老人は中国の神であり、布袋ほていは中国の仏僧で、弥勒菩薩みろくぼさつの化身とされた。出自などに構わず、御利益があれば拜むのが日本人であり、初詣はつもうでにしても、江戸時代までは神社と寺院が一体だったので、日が暮れて同じ境内で除夜の鐘を聞き、氏神うぢがみのもとで夜明かしたのが始まりだとされる。

ところが、明治の初めに神仏分離令が出されたのに端を発し、全国で廃仏毀釈の嵐が吹き荒れる。天皇中心の明治政府を作り上げる上で、本地垂迹説に基づく神仏習合は否定する必要があるだったのである。天皇は天照大神の子孫であるから、日本を統治

するのだと主張するには、天照大神の本地が仏教の大日如来であつては都合が悪いからである。そのため、神社を管理していた別当寺は軒並み破壊された。鶴岡八幡宮では、薬師堂、護摩堂、大塔、経蔵、仁王門など、仏教色のある建造物はことごとく破却された。奈良の内山永久寺などは廃寺となつて、壮大な伽藍がすべて更地となり、国宝級文化財も海外に流失した。特に破壊がひどかつた薩摩では、一〇六六あつた寺院が、すべて廃絶に追い込まれた。

破壊の矛先は世界遺産となつた寺院にも及び、興福寺では五重塔や三重塔が捨て値で売り出され、危うく風呂屋の薪にされるどころだつた。高野山の金剛峯寺も「弘法神社」に、法隆寺も聖徳神社にされそうになつた。さらに、神仏習合が信仰の

中心である修験道は禁止され、山伏は神主になるか僧侶になるか、還俗するかを強制された。吉野の桜も、金峯山寺の本尊金剛蔵王権現の化身とされたことから、すべて伐採されそうになつた。

こうした文化破壊は、一つには本地垂迹説で、長年寺院の支配下に置かれた神社側の怨念や、徳川幕府の庇護を受け、寺請制度で民衆支配の役割を担つた寺院への、庶民側の反発もあつただらう。仏教の故郷であるインドや中国が、西洋人の支配下に落ちたことに対する、アジア蔑視の風潮もあつたと考えられる。

それ以外に、西洋人が日本を支配するために、神道を利用し

ようとしたのではないかという考え方もある。現地人をキリスト教に改宗させるのは常套手段で、徳川幕府がキリスト教を禁止したのは、侵略を防ごうとする意図もあった。日本にキリスト教を広めるのは不可能と知って、侵略しようとする国の文化を破壊することで、精神的なダメージを与え、キリスト教的な神道を作らせようとしていたのではないか。

その一方で、明治政府の側も八百万の神々への信仰を抑圧して、キリスト教的な国家神道で中央集権の国家を築こうとしていた。それが万世一系の天皇への崇拜に通じるからである。神社での神前結婚にしても、キリスト教の教会での結婚式にならったもので、それ以前は自宅で行われるのが一般的だった。本来の日本人の信仰は、八百万の神々に対するものであり、

村々では氏神^{うしがみ}とともに、道祖神や馬頭観音、地藏尊が祀られ、人々は竈^{かまど}の神や厠^{かわや}の神も拝んでいた。それを天照大神を中心とする、唯一神信仰に近い形に変化させようとしたのではないか。

明治の初めに弾圧を受けたのは、仏教や修験道ばかりではない。実は多くの村の社^{やしろ}が廃止され、官製の神社として統合されていった。江戸時代まで続いていた神々への信仰に対し、国家神道が作り上げられたのである。この動きに強く反対したのは、森の思想家南方熊楠^{みなかたぐまぐす}である。

戦後、日本はアメリカ軍の支配下に置かれた。GHQが「日米合同委員会」となっても、属国状態であることに変わりはない。一方、自民党の閣僚の多くは、キリスト教（といっても、

多くは韓国統一教会）を信仰しているという。純粹なキリスト教徒なら、神社に参拝することはしないはずである。キリスト教徒でありながら伊勢神宮や靖国神社に参拝するのは、国家神道がキリスト教の影響を受けていることと関連があるのではないか？

廃仏毀釈で修験道がなぜ目の敵にされたか

江戸時代の庶民にとって、日本で最も偉いのは江戸の公方様くぼう、二番目に偉いのが領主であるお殿様だった。江戸時代の外交では、徳川將軍は日本国王たいくん、大君であり、アメリカのペリーは、皇帝である徳川家慶宛いえよしの国書を持ってきた。

幕府は初代將軍、徳川家康を神格化することで、権力を揺るぎないものにしようとしていた。そこには、天台宗の僧天海の入れ知恵があった。徳川家康は東方淨瑠璃世界じょうるりの教主である薬師如来が、化身として日本に生まれた神、東照大権現であるという信仰が編み出された。日本中に東照宮が作られたのはそのためである。

幕末になると、尊王攘夷の思想が擡頭するが、天皇が日本の中心であるという思想は、水戸学の影響を受けた武士や、国学者の間にはあったものの、庶民の間では依然として、江戸の公方様が日本の支配者だった。

天皇中心の新政府を作るためには、真言宗が説いた信仰、「日本の神は仏の化身」という本地垂迹説が都合悪かった。天照大神の子孫が天皇であると主張する上で、天照大神が大日如来の化身であっては、日本がアジアの中心であるという思想を、庶民に刷り込むことができなからである。また、仏教の説く慈悲の精神を否定しなければ、徴兵制によって庶民を戦地に送り込んで、敵兵を討たせることもできない。

神仏習合を體現していたのが修験道である。山伏は半僧半俗の存在で、幕府の宗教政策のもとでは、真言宗や天台宗の支配下に置かれていた。修験道が信仰の中心にしていたのは、仏の化身である神、権現だった。修験道の開祖、役小角が感得した金剛蔵王権現や、熊野三社の熊野権現が、古来から信仰されていた。武蔵国の高尾山では飯縄大権現、相模国の大山では石尊大権現、加賀国の白山では白山妙理大権現、伯耆国の大山では大智明権現といったように、修験道では神仏習合による多くの権現が信仰されていた。

明治維新で幕府の権威を失墜させるためには、神仏分離を行い、東照大権現を否定する必要があった。権現という存在を抹殺する上で障害になる修験道は、明治政府はよって徹底的に弾圧されたと考えられる。

廃仏毀釈と英領日本

明治の初めの廃仏毀釈は、仏教嫌いだった国学者の扇動や、僧侶に支配されてきた神官の怨念、寺請制度てらうけで民衆の管理を任された寺院への反発などが原因とされる。とはいえ、廃仏毀釈で全寺院を廃寺にした薩摩では、藩主の蘭癖らんへき、オランダかぶれとユダヤ教への改宗が廃仏の底流にあるらしい。国学者の平田篤胤は、漢訳のキリスト教の本を参考にして、国家神道の元となる復古神道を作り上げたという。

日本は幕末にイギリス領となり、イギリス女王の支配下に入った。明治新政府はイギリスの傀儡政権かいらいだったわけだが、事実は民衆には隠されてきた。外国人襲撃が続いていた幕末の日本を、あからさまに植民地としてしまうと、イギリス人の命がどれだけ失われるか分からない。そこで、形だけは独立しているように見せかけ、国を守るためには命知らずだった武士階級を解体し、法制度をイギリス式に改めさせたのである。

宗主国イギリスの手先になったのが、薩摩と長州の下級武士である。明治以降に華族制度が創設され、下級武士の多くは貴族となり、イギリスの手先として、中国やロシアとの戦争に、国民を駆り立てたのである。戦争は膨大な利益をもたらすので、隣国への敵愾心てきがいしんをおおることがしばしば行われる。日露戦争でイギリスに借りた戦費は、一九八六年（昭和六一）になってようやく返済が終わった。

日本はアジアの盟主だとか、大日本帝国だとかおだてられた

が、実質的にはイギリスの植民地で、あえて負けると分かっている戦争に突き進み、国土の大半を焼け野原にして、膨大な犠牲者を出した。それは日本政府に決定権がなく、イギリス女王の臣下だった天皇に、統帥権とうすいけんが委ねられていたからである。戦後は英領日本に、アメリカ軍が駐留するようになり、イギリスとアメリカの二重支配を受けるようになった。

廃仏毀釈によって、日本の文化財の三分の二は失われた。仏教が軽視されて、神道との力関係が逆転し、神々の子孫とされた天皇への絶対服従が求められた。敵国民を殺害することを何とも思わないように、上官が兵士を殴ることが奨励しょうれいされた。因果応報いんがおうほうを信じていれば、人を殺すことなどできないわけだし、

すべてを平等ととらえるならば、強い者に媚こびて弱い者をいじめ抜くことは、人間として卑しい行為とされるはずである。そのタブーを否定するためには、仏教をおとしめて神道を国教とする必要があったのである。

天皇の命令がすべての価値観を凌駕りょうがするとされたので、お国のためなら、隣国を犠牲にすることも正義と信じられた。ところが、天皇はイギリス女王の臣下で、イギリス軍の陸軍元帥げんすいだったのである。この事実から目を背けるべきではない。

憲法改正にこだわる前に、日本は実質的な独立を勝ち取らなければいけない。植民地状態のまま、憲法改正を強行すれば、日本の植民地状態は固定化され、真の独立運動でさえ、反政府運動として弾圧の対象となるのである。

安丸良夫の『神々の明治維新』

早稲田大学にかつて存在した専攻に、文学研究科日本語日本文化専攻というのがあった。日本語学と日本文化研究、人類学という関連の薄い分野が一つにまとめられていたから、同じ専攻の学生同士でも、相手の名前すら覚束ないほど交流がなかった。

一年に一回一堂に会するのが、新人生を歓迎する催しだった。その席で安丸良夫先生のお姿を拝見した。一橋大学を退官された後、早稲田大学で教鞭きょうべんを執とられることになったのだった。僕は在学時には日本語学の授業しか取らなかったから、ついに安丸先生の授業を受けることがなかった。そして、先生は二〇

一六年（平成二八）四月四日に鬼籍きせきに入られた。

僕が廃仏毀釈に関心を持つのは、明治期に平田派の国学者や神官、新政府の役人によって、多くの寺院や仏像が破壊され、民衆の信仰形態が強制的に改変されたという事実があるからだ。チベットで強行された文化大革命に匹敵する破壊が、十九世紀後半の日本でも行われていたのである。

本書でまず強調されたのは、宗教に対する権力者の警戒心である。民衆を煽動せんどうするものとして、織田信長は伊勢長島で一揆いっぎを起こした一向宗（浄土真宗）の門徒を皆殺しにした。江戸幕府は島原の乱で投降しなかったキリシタンを、女子供も含めてすべて殺戮さつりくした。宗教に対する警戒は、日本近海を西洋の艦船が出没する頃からふたたび高まる。

廃仏毀釈の直接的な原因としては、キリスト教の浸透に対する恐れがあったという。極楽や地獄を説く仏教も、権力者から見れば、地上の権力に服さないという点では、キリスト教と同様に、いかがわしいものに見えた。そこで、人心を統一するための国家神道の確立が画策され、平田派の国学者は仏教の撲滅^{ぼくめつ}まで目指していた。

破壊されたのは別当寺として、神社を支配していた天台宗・真言宗の寺院ばかりでない。廃仏毀釈が徹底された薩摩や隠岐^{おき}では、他宗派を含めた全寺院が廃絶させられてしまった。神仏習合の中心にあった修験道は禁止され、吉野の金峯山など執拗に抵抗した山を除けば、大半が神社にされてしまい、仁王像^{におう}や鐘楼などは除かれ、石仏は首を落とされ、谷に投げ落とされた。

日本人の心のふるさとである富士山でも、すべての仏教施設は除去されてしまい、仏の名がつく地名もすべて変更させられた。伝統的な日本の信仰形態は、神道の国教化のために犠牲となったのである。

弾圧の対象となったのは、仏教や修験道ばかりでない。『古事記』や『日本書紀』に登場しない神々も、迷信として否定され、多くの社が破壊されて、官製の神社に統合されていった。村の神社や祠^{ほこら}の中には、由来の不明なものや、神仏習合のものが多かったからである。平^{たい}将門^{しらのまさかど}を祀った神田明神では、朝廷に逆らった武将を神に祀っていることが問題視され、祭神から外すことを強制された。

民間信仰は権力に反抗する力を持つ。神がかりなども、民衆

の不满が神の声を借りて現れることが危険視され、弾圧の対象となつたのである。権力者にとって、人間の無意識に関わる生きた宗教は、否定すべきものとしか映らなかつた。その観点から言えば、今の神社神道は宗教の本来の力を抜かれたもので、神々への信仰の形態は、教派神道に引き継がれたのではないか。廃仏毀釈に断固として抵抗したのは、浄土真宗の門徒だつた。神社に詣でないというのが、門徒の習慣だつたからである。西洋諸国からキリスト教禁止に対する批判が続いたことで、新政府もようやく「安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」という制限付きで、信教の自由を認めることになつた。平田派の国学者による仏教撲滅の試みは失敗したが、廃仏毀釈と神社統合で、神々への信仰は習俗と化し、人心の統一は

「教育勅語」の暗誦あんしゅうを民衆に課すことよつて行われるようになった。

金剛藏王権現

修験道の開祖は役小角である。役行者と呼ばれ、神仏習合の修験道の開祖とされた人物である。寛政年間に光格天皇から、神変大菩薩という諡号を賜った。金剛藏王権現とは、役小角が感得した修験道の神である。末法の衆生には、柔和な仏ではなく、鬼神をも畏怖させるほどの形相の神の出現が求められたのである。

青黒い体に火焰を背負い、右足を蹴り上げた忿怒の姿で相手を睨みつけ、かっと開かれた口で怒鳴りつける。不動明王を力動的にアレンジしたかのようなのである。しかも、金峯山寺の蔵王堂の金剛藏王権現は、三体並ぶだけに、大きさと偉容に圧倒さ

れる。過去・現在・未来の衆生を救うため、釈迦如来・千手観音・弥勒菩薩が、三体の金剛藏王権現に化身したとされる。蔵王堂に祀られた雄壮な姿は、今に残る立像の中で最高傑作なのではないか。

明治の廃仏毀釈の中で、神仏習合の修験道は禁止され、山上にあった修験道の寺院も、多くが廃寺か神社に鞍替えさせられた。東京の御岳山にある武蔵御嶽神社も、江戸時代まで蔵王権現を祀っていた。金剛藏王権現の立像を拝むためには、関西に足を運ばなければならぬのだろうか。

尺八の音と虚無僧

日本文化に惹かれて来日する欧米人は、現在では珍しくない。進学が目的のアジア系の留学生に比べて、日本独自の文化への関心が強く、柔道や空手、合気道などを実践していたり、茶道や華道の会に参加したり、和服を實際に着てみたり、中には禅寺の門をたたいたりする人もいる。

尺八もまた、禅などの文化に傾倒する欧米人には魅力ある楽器である。ただ、尺八を吹いている虚無僧の姿は、日本人でも時代劇でしかお目にかかれない。というのも、尺八を吹くことを禅の修行とした普化宗が、明治の初めに廃止させられているからである。

その当時は廃仏毀釈の嵐が吹いて、多くの寺院や仏像が破壊された。神仏習合を宗旨とした修験道も、一度は廃止させられたが、天台宗や真言宗の中で生きながらえ、現在でも命脈を保っている。

普化宗の方も、教会としては復活しているようだが、虚無僧の姿は一向に見かけない。それはかつて武士でなければ、虚無僧になれなかったこと、浪人が虚無僧の姿に身をやつす場合が多かったことと関係があるのではないか。庶民の信仰と無縁だった普化宗の世界は、市井の心よりどころにはなれなかったのだろう。

そもそも虚無僧は、自身の悟りを目指していても、他者の救済には関心が薄かったのではないか。尺八の音の中に命を見出

す孤高な演奏家、一匹狼の旅人といったところか。

戸隠不動尊の面影

僕がまだ若かった頃、正月の休みに川崎北部の生田緑地を散策したことがあった。枳形山ますがたやまのふもとを歩いていくと、長い石段が目に残まった。由緒ある寺院らしく、延々と続く参道の左右には、石仏や石碑が随所に並べられている。弘法大師の名前が刻まれているから、真言宗のお寺に違いなかった。真冬の暖かい日で、落葉した木々の枝が青空に映えている。

正面に古びた小さなお堂があった。辺りに人影はなく、時折、鳥が鳴き交わす声しか聞こえなかった。お堂の屋根には背後の高木が、天蓋てんがいのように枝葉を伸ばし、木漏れ日こもひが本堂の壁や参道で揺れている。祈禱をする旨むねが書かれた張り紙があったが、

正月だというのに参拝客は僕しか見えない。しかし、格式のある参道と、森と一体になった本堂のたたずまいが、僕の心を癒してくれた。人には知られていない、隠れた名所を見つけたんだという思いで、静かな興奮を抑えられずにいた。

そういえば、以前、この寺院に通じる空き地で、山伏を見たことがある気がした。木を組んで藁わらを山のように載せ、火を点じて柴灯護摩さいとうごまを修していたような。僕が見たのは幻だったかもしれないが、恐らく、この寺院と関わりがある行事なのだろう。

寺の名は戸隠不動尊とがくしふどうそん。戸隠といえば、信州の戸隠神社を思い起こすだろう。戸隠山は修験道の道場で、実道院には不動明王像（高さ三九・五センチ）と二童子が祀られていた。明治のはじめ、神仏分離令が発せられると、全国で廃仏毀釈の嵐が吹

き荒れた。戸隠では寺院を一切廃したため、不動明王像と二童子像は、東京本所の法樹院に移された。一九三〇年（昭和五）に生田緑地のこの地に、戸隠不動尊として本堂が建立こんりゆうされ、明王像と童子像も安置されたのである。武相不動尊ぶそう二十八札所の第二十六番札所となり、酉年とりとしには多くの参詣者が訪れたという。不動明王が酉年生とりとしまれの守護仏とされているからだろう。だとすると、僕が見た柴灯護摩は、その年に行われていたものということになる。

冬の晴れた日の暮れ時、僕は生田緑地の反対側の急坂を、とぼとぼ自転車を引いて登っていた。何気なく振り返ると、向かいの丘から白い雲が沸き上がっている。夕焼けに映えているかに見えたが、方角から考えるとどうもおかしい。

遠くからサイレンが鳴り響いてきた。丘にこだまして、何の音かははつきりしない。どうしたんだろう。白い雲はすっかり橙に染まり、稜線からは灰色の煙が盛り上がってきた。耳を澄ませるとパチパチ、何か爆ぜる音が聞こえる。火花が燃える雲を美しく彩り、下からは時折、真つ赤な舌が覗いていた。

どこが燃えているのだろう。恐らく、丘の向こう側、少し下った辺りに違いない。とすると……。炎上していたのは実は、正月に詣でたばかりの戸隠不動尊だった。僕が見つけたばかりで、隠れた憩いの場として大切に思っていた場所だった。火炎を背負った明王みょうおうを本尊とした寺は、今まさに焼け落ちようとしていた。ここからでは、暖かな囲炉裏いろりの火ぐらいにしか見えないが。それにしても、あの悲しげな光は何だ！

戸隠不動尊が焼失したのは、一九九三（平成五）年冬のことだった。それから何度目かの春が訪れた。僕は生田緑地の枡形山から、戸隠不動尊があった辺りを探した。以前は鬱蒼うつそうとした森に包まれ、本堂があること自体気づかなかったが、不自然に木々が切り払われ、石段が伸びているのが見えた。胸が締めつけられる思いがして、僕は枡形山を駆け下りていった。いったん、向ヶ丘遊園駅前に出て、専修大学の生田校舎に向かう道を急いだ。

かつての石段の入口に立った。何かが変わっていた。参道の両側にあった石仏や石碑は、すべて取り払われていた。正面を見上げると、枝葉に包まれた本堂の辺りは、火事で周囲の木々

もろとも焼け落ちたのだろう。ぽっかり空間があいて、太陽の光が燦々^{さんさん}と敷き詰められた石を照らしていた。本堂の柱があった位置には、石柱が名残惜しむように立っている。何だかギリシヤかどこかの遺跡を目にしているようで、祈りが捧げられていた痕跡^{こんせき}はない。心を癒す霊気も失われて、すべてが乾ききっていた。

喪失感はずばらく癒されなかった。緑に包まれたお堂の姿を、心にだけはとどめておきたかった。ふたたびこの地を訪れた時、本堂が焼けて二十年の歳月が過ぎていた。正月三日の昼下がりに、石段を登って参道を進むと、お堂の柱の位置を示す石柱が、以前と変わらぬ姿で立っていた。しかし、何かが違う。敷き詰められた石板の間、あちらこちらから、芝が生えていた。背後に

はシラカシの枝が天高く伸びていて、かつての屋根以上の高さになっていた。人工的だった不動尊跡地も、二十年の歳月を経て、自然の一部に戻り始めていた。傾いた冬の日が柔らかく辺りを照らしていた。

廃仏毀釈の実態

愛染院

伏見稲荷大社は江戸時代まで、別当寺愛染院の管理下にあつた。お稲荷さんのお使いは狐だが、インドの神である荼吉尼天も狐を従えている。本地垂迹説では稲荷神は荼吉尼天の化身とされた。廃仏毀釈で愛染院は廃寺となった。

安楽寺天満宮

菅原道真を祀る太宰府天満宮は、道真の靈廟であり、江戸時代までは、本殿の位置に別当寺の安楽寺が建っていた。廃仏毀釈により、安楽寺は廃寺となり、講堂、仁王門、本願寺、法

華堂などが破却された。十一面観音菩薩・不動明王・毘沙門天の三尊は、佐賀の大興善寺に移された。天満宮のご神体は、かつては道真直筆の法華経であるとされたが、明治以降は道真の木像に改められた。安楽寺天満宮は太宰府神社に改められ、太宰府天満宮と名乗れるようになったのは、戦後になってからである。

伊勢神宮

伊勢神宮の内宮に祀られている天照大神は、皇室の祖神であると考えられる。一方、本地垂迹説では本地（本体）が大日如来であるとされていた。江戸の庶民のお伊勢参りは、外宮の豊受大神宮への豊作祈願だった。江戸時代まで伊勢神宮にも神宮寺

があり、神仏習合の歴史が続いていた。外宮の本地仏は妙見菩薩で、北極星を仏教に取り入れたもの。現在は神奈川の読書ランドに遷座している。

巖島神社

かつては宮島そのものがご神体とされ、人の居住は禁止されていた。神仏習合により、弁財天への信仰が広がった。平清盛による大修築で、社殿は現在の形となる。「平家納経」も有名である。巖島の弁財天は、竹生島、江ノ島とともに日本三大弁天として、人々の尊崇を集めた。江戸時代までは、大聖院が別当寺を務めた。明治の神仏分離で、弁財天は大願寺に移された。五重塔は破壊を免れたが、神社建築らしくしろと命じられ、

社殿の朱塗りの柱は朱を剥がされて、明治時代は白木の柱で本来と似ても似つかない姿だった。

石清水八幡宮護国寺

豊前の宇佐八幡宮の神託により、奈良大安寺の僧行教が、京の都に宝殿を造営して祀ったのが始まり。八幡神は応神天皇であるときれたが、本地垂迹説では、阿弥陀如来の化身とされ、僧形八幡神像も造られた。廃仏毀釈の際に護国寺は廃寺となり、宝塔や大塔も排除された。

内山永久寺

奈良の内山永久寺は、鳥羽天皇の勅願による由緒ある大寺

院で、石いそのかみじんぐう上神宮の別当寺だったが、明治初期に寺領を没収されて廃寺となり、西の日光と呼ばれた壮大な伽藍がらんはすべて更地となった。残された池が往時を偲しのばせる。重要文化財の愛染あいぜん明王像みょうおうは、東京国立博物館に保管されている。

永代寺

寛永年間に僧長ちやうせい盛せいによって、永代島に建立こんりゆうされた永代寺は、富岡八幡宮の別当寺だった。真言宗関東五箇寺の第一として栄えた。広重ひろしげの描いた永代寺の庭園は、花の名所として知られていたが、廃寺にされた際に破壊されてしまった。現在の永代寺は、明治中期に永代寺の塔頭たつちゆうだった吉祥院が、寺号を引き継いで再興したもの。

大山寺（相模国）

大山寺おおやまでらとも呼ばれる。江戸の庶民は大山詣おおやまもうでを盛んに行った。聖武天皇勅願の大山寺は阿夫利神社の別当寺となり、不動明王ふどうめいおうと石尊大権現せきそんだいこんげんへの信仰で栄えた。明治の廃仏毀釈で大山寺は権田直助ごんだなおすけら数百人の暴徒に破壊され、阿夫利神社下社が建てられた。祭神も大山祇神おおよまつみのかみなどに改められた。本来の神石尊大権現ごんだいこんげんの回向柱えこうばしらは下社本殿の地下に隠されている。大山寺は明治中期に現在地に再建されたもの。

寛永寺

三代將軍家光が徳川家の菩提寺ぼだいじとして、天台宗の天海に建て

させた大寺院。東の比叡山ひえいざんとして、東叡山とうえいざんと称された。代々輪りん王寺宮おうじのみやが、寛永寺の住職、日光門主にっこうもんしゅ、天台座主てんだいざすを務めた。幕末の上野戦争で、根本中堂、本坊など大半の建物が焼失し、寺領を没収されて、かつての境内のほとんどが上野公園や博物館の敷地となった。焼け残ったのは、五重塔、東照宮、観音堂などで、川越の喜多院の本地堂を移して本堂とした。第二次世界大戦で、徳川家靈廟れいびょうも焼失した。

吉水院きつすいいん

『太平記』に描かれた金峯山寺きんぶせんじの僧坊「吉水院」は、後醍醐天皇の御座所になったことから、廃仏毀釈の際に「吉水神社よしみず」に改変された。天皇は神として神社に祀られるべきという主張

だが、江戸時代までの皇室は仏教を重んじていた。後醍醐天皇自身、五鈷杵ごこしよや金剛鈴こんごうれいを持って密教の加持祈禱かじきとうを行っていた。

金峯山寺きんぶせんじ

役小角えんのおづぬが開山したとされる修験道の寺で、豊臣秀吉とよとみひでよしにより再建された蔵王堂には、金剛蔵王権現三尊こんごうざおうこんげんが祀られている。明治政府が修験道を禁止したため、一時は廃寺に追い込まれて、蔵王堂は金峯神社の口宮くちのみやとなった。吉野の桜も本尊金剛蔵王権現の化身とされたことから、すべて伐採されそうになった。明治の中頃、天台宗修験派として再興を果たした。

久能山東照宮

日光が世界遺産になったのは、日光東照宮、輪王寺りんのおうじ、二荒山ふたらかさん神社のほぼ全体が保存され、神仏習合という日本の伝統的宗教の全体が保存されていたためである。それに対して、久能山東照宮くのうさんは五重塔が破壊され、鐘樓の鐘は除かれて太鼓が置かれ、東照大権現の本地仏薬師如来を祀った本地堂は、日枝神社ひえに改められた。

顕光寺

戸隠とがくしも江戸時代までは、戸隠山顕光寺という天台宗の大寺院だった。明治の廃仏毀釈で、修験道は禁止されて戸隠神社となった。仏像などは周辺の寺などに移された。実道院にあった不動尊と二童子は、川崎市多摩区の戸隠不動尊に祀られたが、

一九九三年（平成五）に本堂が焼失して廃寺となった。

興福寺

法相宗ほうそうしゅうの大本山である興福寺は、春日大社かすがたいしやの別当寺だったが、寺領のほとんどが没収され、一乗院、大乘院など大半の建物も破壊されて廃寺同然となり、五重塔、三重塔も風呂屋たきぎの薪たきぎにされるところだった。

諏訪大社神宮寺

明治の廃仏毀釈で、諏訪大社の神宮寺も破壊された。弘法大師空海が建立した普賢堂、五重塔、鐘樓、釈迦堂、不動堂なども、すべて跡形もなく破壊し尽くされた。

大山寺だいせんじ（伯耆国ほうきのくに）

奈良時代に金蓮こんれんによって、伯耆大山ほうきに開かれた天台宗の寺院で、修験の山として栄えた。本尊の地藏菩薩のほか、化身の大智明ちみょうこんげん権現ごんげんが祀られていた。修験道の禁止により、大山寺は廃寺を言い渡された。本堂は大神山神社おのがみやま奥宮おくみやとなり、法親王ほっしんのうが住まわれた本坊西楽院は取り壊された。明治中期によく復興が認められ、かつての大日堂に地藏菩薩を祀って本堂とした。

鶴岡八幡宮寺

鶴岡八幡宮寺では、鶴岡つるがおか二十五坊をはじめ、薬師堂、護摩堂、大塔、経蔵、仁王門など、仏教色のある建造物はことごと

く破却されたため、創建当時の神仏習合の姿は失われた。

出羽三山

出羽三山とは、月山がつさん、羽黒山はぐろさん、湯殿山ゆどのさんを指す。月山と羽黒山は天台系の修験、湯殿山は真言系の修験だった。明治の廃仏毀釈で月山と羽黒山からは仏施設が排除され、出羽三山の神仏分離が進んだ。羽黒山には荒沢寺こうたくじや五重塔が残り、湯殿山には即身仏の大日坊や注連寺ちゅうれんじなどが残った。

白山本宮白山寺

七一七年（養老元）、泰澄たいちようによって開かれた。修験の山として栄え、十一面観音菩薩を本地仏とする白山妙理はくさんみょうり大権現だいこんげんが祀

られていた。白山本宮白山寺には護摩堂や地藏堂などもあった。廃仏毀釈でふもとにあった白山寺も廃寺となり、白山比咩神社への改組を余儀なくされた。排除された仏像をいたわしく思った林西寺の住職が、白山を開山した泰澄大師坐像や、観音像、阿弥陀如来像を引き取り、白山本地堂を建てて祀った

箱根権現

江戸時代までの箱根権現は、七五七年（天平宝字元）創建の箱根山金剛王院東福寺という別当寺の管理下にあった。法躰（文殊菩薩）・俗躰（弥勒菩薩）・女躰（觀世音菩薩）が、箱根三所権現であるとされた。明治の廃仏毀釈で、芦ノ湖畔にあった奈良時代以来の仏閣は破壊され、跡地は現在、箱根神社境

内の駐車場となっている。

富士山本宮浅間大社

富士山の神はかつては浅間大菩薩と呼ばれていた。廃仏毀釈により、薬師堂、阿弥陀堂、経蔵、普賢延命堂、摩利支天社、護摩堂、鐘楼堂、帝釈堂、三重塔、大日堂、五大堂などほことごとく破却された。山頂の石仏は首を落とされ、谷へ落とされた。大日堂は浅間大社奥宮に改められた。

松尾寺

「金毘羅船々」の歌で歌われているのは「象頭山金毘羅大権現」。不動明王を本地仏とする水神である。廃仏毀釈で象頭山松尾寺

は金刀比羅宮ことひらぐうという神社に改変され、祭神も大物主神おおものぬしのかみに変更された。金毘羅大権現は危うく難を逃れ、普門院（現在の松尾寺）に運び込まれた。現在は北海道小樽市の金毘羅大本院に祀られている。

与願寺（岩本院）

日本三大弁天の江ノ島弁財天も、もとは与願寺（岩本院）という真言宗の寺院の管理下にあった。明治の廃仏毀釈の際に、三重塔などの仏教施設は破壊され、江島神社に改められた。祭神はそのとき弁財天から宗像三女神むなかたさんじょしんに変更された。現在、弁財天も辺津宮境内へつみやでまつられているが、岩本院の建物は岩本楼という旅館となった。